

オスマン朝支配下バルカン半島における ルメリ・ユリュク集団の史的研究

岩本佳子

京都大学大学院文学研究科西南アジア史学専修 研修員
(現 大阪市立大学大学院都市文化研究センター 研究員)

緒言

13世紀末から14世紀初頭にかけて、アナトリアの西北部で誕生したオスマン朝は、王朝の草創期の14世紀からバルカン半島へその勢力を広げ、やがては世界史上の大帝国を築き上げた。オスマン朝による征服後、ルメリ州と名付けられたバルカン半島では、16世紀にはルメリ・ユリュクと呼ばれる集団が登場してくる。このルメリ・ユリュクは、免税特権と引き換えに、戦時は遠征に従軍、平時は城塞の修繕や船の建造といった様々な労役に従事する、ある種の奉仕者集団であった。

ルメリ・ユリュクをめぐるのは、先行研究の中で、その居住地や人口、免税特権やそれと引き換えの軍役、奉仕活動の内容¹⁻³⁾が明らかとされてきた。オスマン朝では、課税目的で地域の担税者の居住地、人口、課税対象物の生産量と額その他を記録した租税台帳と呼ばれる史料が作られてきたために、特定地域や特定の住人集団の生産活動、土地利用を細かに明らかとすることができる。しかし、ルメリ・ユリュクは免税特権を有しているがために、原則的に租税台帳には彼らの生産活動、土地利用に関する情報が記録されない。そのために、その生産活動、土地利用を解明することは難しいとされてきた。

しかし、ルメリ州に属する各県の租税台帳の中には、しばしば、本来の居住地以外の土地にやって来て、その土地を利用するルメリ・ユリュクの記録が見られる。このような場合は免税特権が適用されず、ルメリ・ユリュクからも土地利用に関する税が徴収されたため、例外的に、ルメリ・ユリュクがどのような生産活動や土地利用を行っていたのか、その一端を垣間見ることが可能である。

方法

2013年9月15日から10月21日にかけて、トルコ共和国、ブルガリア共和国を中心に、ルメリ・ユリュクの諸集団が

多数居住していた地域で史料および現地調査を行った。

ブルガリア共和国、ソフィアの聖キリル・メトディオ国立図書館(以下ブルガリア国立図書館)、トルコ共和国、イスタンブールの首相府オスマン文書館(以下BOA)に収蔵されるルメリ州各地の県別租税台帳を閲覧・蒐集し、その中に含まれるルメリ・ユリュク関係の記録の分析に努めた。トプカプ宮殿博物館附属図書館では、16世紀中頃に作成された勅令の記録簿である枢機勅令簿(所蔵番号Koğuşlar nr.888)を閲覧、調査する機会に恵まれた。本史料は、956/1549-50年(以下、ヒジュラ暦/西暦の形式で表記)作成とBOA所蔵の最古の枢機勅令簿よりも10年前に作成されており、後半部の260b-520a葉は今まで研究に利用されていない点で貴重である。

また、ブルガリア各地に残る14-16世紀のオスマン朝史跡を調査し、ハスコヴォ、スタラ・ザゴラ市では史跡に残された銘文の写真撮影、その解読を行った。

結果

1. ルメリ・ユリュクの生業の解明

今回の調査の中で、ブルガリア国立図書館では、1061/1650-51年作成 F.1/664、1033/1623-24年作成 F.140A/ae.56とルメリ・ユリュクを扱った17世紀の新史料を発見、蒐集することができた。イスタンブールでは、BOAの調査で、新たにTT.d.274、TT.d.286といったヴィゼ県租税台帳を確認、蒐集した。今回の調査により、ルメリ・ユリュクの土地利用記録を含む県別租税台帳を全巻閲覧でき、全体像の把握が可能となった。

これら土地利用の記録を含む県別租税台帳からは以下のことが判明した。トラキア平原に位置するヴィゼ県⁴⁾、ドナウ川流域にあり平地が広がるスィリストレ県⁵⁾では、ユリュクが住む村が多く存在し、農耕が盛んに行われていた。対して、山がちなセラニク県⁶⁾では農耕も行われているものの、ユリュクの土地利用は牧畜が中心である

表1 ルメリ・ユリュクの耕作記録が残る県別租税台帳の一覧とルメリ・ユリュクが支払った土地利用に関する税の税額

県名	租税台帳			徴収された諸税（担税額 単位：アクチュ）		
	No.	作成年		総額	農耕関係	牧畜関係
		AH.	AD.			
エディルネ県	TT.d.77	925	1519-20	15,522	600	15,178
	TK.TT.d.65	976	1568-69	73,150	44,465	6,556
	TT.d.1001	16世紀末		7,765	3,420	2,371
	TT.d.729	17世紀初頭		—	—	3,637
セラニク県	TT.d.7	883	1478	2,224	1,040	—
	TT.d.374	16世紀中頃		5,956	4,293	286
	TK.TT.d.186	976	1568-69	48,897	9,946	39,457
	TT.d.723	1022	1613-14	125,316	16,570	31,870
ヴィゼ県	TT.d.185	934	1527-28	523	327	196
	TT.d.274	958	1551	6,451	5,978	80
	TT.d.286	960	1552-53	26,267	23,470	100
	TK.TT.d.165	976	1568-69	56,731	47,094	639
スイリストレ県	TT.d.483	977	1569-70	227,079	165,621	4,974
	TK.TT.d.83	1006	1597-98	255,495	174,709	7,665

(TT.d.: BOA所蔵租税台帳 TK.TT.d.: 地券および地券簿総局文書館所蔵租税台帳)



写真1 スタラ・ザゴラ市 宗教博物館銘文

など、地形に応じた土地利用が各地で行われていたことが判明した(表1)。さらに下記の租税台帳には「外からやって来たユリュクが耕作を行っている」という旨の記録が見られる⁷⁾ことを確認した。ルメリ・ユリュクが本来の居住地以外の土地にやって来てその土地を継続的に利用することが認められ、実際にそのような土地利用が行われていたことが明らかとなった。

トプカプ宮殿博物館附属図書館に所蔵される枢機勅令簿(所蔵番号 Koğuşlar nr.888)からは、ルメリ・ユリュクの動員記録は少ない一方、アナトリアとルメリの双方に居住しており、ルメリ・ユリュクと同じく、免税特権と引き換えに軍役や労役に従事する集団であるヤヤ・ミュセッレムの遠征への動員の記録が、ルメリ・ユリュクと比べて非常に多いことを確認した。

2. ブルガリアに残るオスマン朝初期の建造物、銘文の蒐集

オスマン朝のバルカン半島征服、支配の伸長を考察するうえで、重要な史料となる史跡に残る銘文類を調査・蒐集した。

現在のブルガリアの各地には、オスマン朝の支配下におかれた14から19世紀にかけて、モスクや市場といった多数の建造物が作られた。現在のブルガリアにおいては、オスマン朝支配に対する悪感情もあり、これらの建造物の保存状況が良いとは言い難い。実際の調査の中で先行研究では紹介されていた建造物がすでに跡形もなくなっている、または、建物は残っていても、建造者や建造年を記した貴重な史料である銘文が失われてしまっていることも多く見られた^{8,9)}。

その中で、ブルガリア南西部、バルカン半島南麓に位置するスタラ・ザゴラでは、モスクを転用した宗教博



写真2 ハスコヴォ市 エスキ・ジャミヤ銘文

博物館の入口に、モスクの建造銘文を確認できた(写真1)。銘文からは、このスタラ・ザゴラのモスク、エスキ・ジャミヤは811/1408-09年に建造されたこと、オスマン朝第4代君主バヤズィット1世死後の空位時代に、次代君主メフメト1世との皇位争いに敗れたスレイマン王子の部下により建造されたことが判明した。

ブルガリア南西部、トラキア平原のハスコヴォでは、現在もモスクとして使われているエスキ・ジャミヤで797/1394-95年と記された建造銘文を発見、撮影した(写真2)。これは、確認されている限り、現在のブルガリアに残る建造銘文の中では最も古い年代が記されており、バヤズィット1世治下の史料として貴重なものである。

考 察

ルメリ・ユリユクの生産活動・土地利用の記録を含む県別租税台帳からは、ルメリ・ユリユクが地域や集団ごとに多種多様な土地利用、生産活動に従事していたことが明らかとなった。また、免税特権と引き換えに軍役や労役に従事する奉仕者集団という性格が強いルメリ・ユリユクにおいても、「外からくるユリユク」の表現が示すように、移動性や流動性の高い土地利用が行われていたことが判明した。そもそも、「ユリユク」とは「歩くもの」を意味し、トルコ語ではいわゆる遊牧民を指す語である。奉仕者集団の性格が強いルメリ・ユリユクにおいても、ユリユク本来の移動性の高い生活様式が保たれていた可能性が示された。また、枢機勅令簿の調査から、16世紀の中頃から後半にかけて、ヤヤ・ミュセッレムからルメリ・ユリユクへ奉仕活動の主要な担い手が変化した可能性が示唆された。これらの問題に関しては、今後の課題としてさらなる研究を進めていきたい。

ブルガリア国内には、バヤズィット1世治世、空位時代とトルコ共和国においても点数が少ない時期の貴重な銘文史料が残されていることが判明した。オスマン帝国が

早くからバルカン半島へ渡り、征服を進めたことは多くの研究で指摘されているが、銘文史料からも初期オスマン帝国がバルカン半島において建築活動を行い、支配を固めていたことが明らかとなった。

要 約

オスマン帝国は王朝の草創期から、バルカン半島において様々な建築活動を行うなどしてその支配を固めていた。そのような中、ルメリ・ユリユクという免税特権と引き換えに軍役や奉仕活動に従事する奉仕者集団が形成され、主に16世紀後半以降、中央政府の命令に従い様々な奉仕活動に従事していた。また、これらルメリ・ユリユクは、地域や集団ごとに多種多様な土地利用を行い、生産活動を行っていた。

謝 辞

公益財団法人三島海雲記念財団の研究助成金により、従来の研究では着目されていなかったブルガリア国立図書館に所蔵されるオスマン語文書・帳簿を中心に、関連する史料を重点的に閲覧・蒐集することができた。史料調査にあたって現地を実際に訪れることができたことは研究にあたって非常に参考となり、さらなる研究の展望が広がった。改めて御礼申し上げたい。

銘文の解説については京都大学大学院文学研究科教授井谷鋼造氏から、ブルガリア現地調査に関しては東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程の早坂由美子氏から、貴重な情報や御教授をいただいた。記して謝意を示したい。

注および文献

- 1) M. T. Gökbilgin: *Rumeli'de yürükler, tatarlar ve evlâd-ı fâtiḥân*, 2. baskı, İstanbul, İşaret Yayınları, 2008.
- 2) M. İnbaşı: "Yeni belgelerin ışığında Rumeli yürükleri" in: *Osmanlı 4*, Ankara, Yeni Türkiye Yayınları, 151-69, 1999.
- 3) A. Кальонски: *Юрүкте*, София, Просвета, 2007.
- 4) トラキア平原の東部に位置し、現在のトルコ共和国クルラレリ県とその周辺地域に相当する。
- 5) 現在のブルガリア共和国スィリストラ市周辺から、ドナウ・デルタまでのドナウ河南岸の地域に該当する。同地域には、テュルク系住民が現在も居住している。
- 6) 現在のギリシャ共和国テッサロニキ市周辺の地域。いわゆるギリシア領マケドニア地方にほぼ相当する。
- 7) 例えばTK.TT.d.65のp.16, TK.TT.d.165のp.159を参照された。
- 8) M. Kiel: *Bulgaristan'da Osmanlı dönemi kentsal gelişimi ve mimari anıtlar*, Türkçe tercüme İ. Kolay, Ankara, T.C. Kültür Bakanlığı Yayınları, 2000.
- 9) P. Mijatev: "Bulgaristan'daki Osmanlı anıtları", çev. Y. Yücel, *Bellekten/Türk Tarih Kurumu*, L, 196, 291-313, 1986.